

超えるのではなく辿る、二つの文化

学問との再契約

宮野公樹

(京大大学学際融合教育研究推進センター准教授)

Naoki Miyano

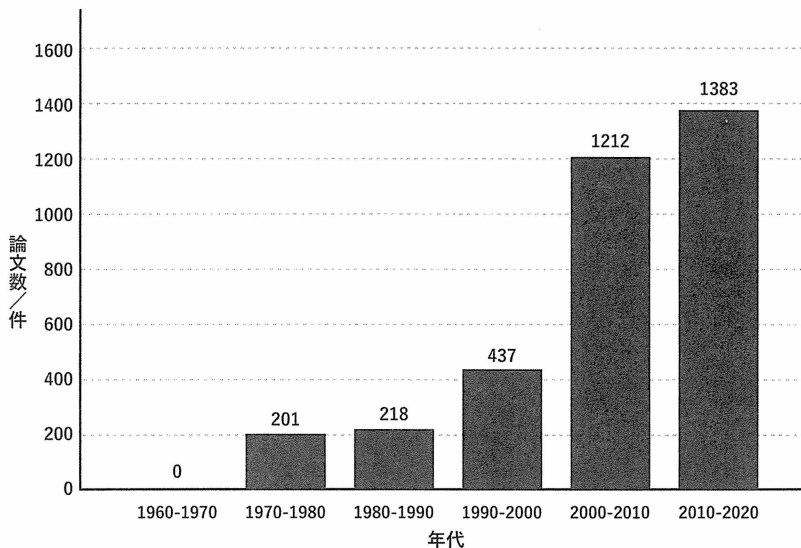
1973年生まれ。立命館大学理工学部卒業。同大学院博士後期課程修了。カナダMcMaster大学、立命館大学、九州大学を経て、現職。専門は大学論、学問論、科学技術政策。京大大学総長学事補佐、文部科学省学術調査官の業務経験ももつ。研究・イノベーション学会理事。一般社団法人STEAM Association代表理事。近著に『問いの立て方』(ちくま新書)がある。

「学際」という言葉が流行っている。国立情報学研究所学術情報ナビゲータCIEで、論文タイトルに「学際」を含む論文数を調べてみただけで、その熱狂ぶりがわかる(図1)。また、我が国の大学において「学際」を掲げる研究所やセンター等の内部組織を検索してみると、その数、実に五十以上になる(筆者調べ。なお筆者の所属組織も含まれる)。

我が国に特化して政治的、時代的にこの勃興を説明し

ようとすると、一九九六年日本学術振興会の未来開拓事業(複合分野)が学際研究振興における明確化の起点と言っている。この複合分野には、「生命情報」といった今日すでに確立されたとも言える学術分野や、「電子社会システム」といった、情報科学・工学、法学、政治学、経済学、倫理学等の面から学際的に、また、国際、国家、地域、個人等の視点から総合的に考察するいわゆる文理融合の学術分野も含まれていた。そして、この未来開拓

図1 タイトルに「学際」を含む論文数



出典：筆者調べ及び作成

事業の序文において「二十一世紀を展望し、地球規模の問題の解決、経済・社会の発展、豊かな国民生活の実現等を目指し、我が国の未来の開拓につながる創造性豊かな学術研究を大学主導により重点的に推進することを目的としています」とあるように、「学際研究」活発化の背景には、一層複雑化する課題解決への社会的要望があることは明白である。

端的に言つて、この二十五年にわたる流行は、素直に喜ぶようなことではない。

一に、言うまでもないことだが、学術分野に限らず、この世において何か(の分野)と何か(の分野)が「融合」していないもの(分野)など、どれ一つとしてない¹⁾。ゆえに、「学際」や「異分野融合」を特段区別し、それが大事と叫ぶのは、目先の都合や需要に囚われ、本来の学問の在りようを疎かにしている証拠とも言える、学際とはあまりに当たり前のことなのだから。

「そうだとっても学際そのものは良きことなのだから、広く展開するのは別にいいではないか」という声が聞こえてきそうだが、今日において哲学と呼ばれる紀元前五

○〇年頃のソクラテスの「考え」に端を発し、今のこの一連の学問体系があるとするなら、一つの種から育った樹木の枝葉を結合・統合させようというのは、知あるいは分野というものを物的かつ固定概念的に捉えた極めて操作的な行為、いうなら「^②都合主義」なのだ。

確かに、課題解決においては、複数分野の知識は必要不可欠であり、課題の解決という目的のもとに知を使用すればよいが、それは知の活用であり、知を愛し知そのものを問う学問本来の姿とは大きく異なる。それが学問の営みであるなら、樹木の枝葉を結合、統合しようなどとはせず、幹をたどって根本(ねもと)に戻ろうとするだろう。そうすれば、自ずと各個別が一つに集約されるのだから。

神学者パウル・ティリツヒが学問について語った「すべての学問は唯一の真理に奉仕するものであつて、全体との関連を失えば死滅してしまう」の含意はここにある。^③全体との関連を失うとは、枝から離れた葉単体のことであり、それは専門ではなく個別なのだ。すなわち、学問においてはどのような専門であれそれは入り口でし

がなく、「学際」および「異分野融合」とは、他の分野との関わりにより自分の立ち位置を確認する行為と理解されるだろう。哲学者三木清はよりラディカルにこう言った。「専門家たるもの、突き詰めればおのずと基礎たる哲学に接触するのは当然とし、自分の専門の意味をその外に立つことによつてよりよく反省せんがため、あるいは自分の保持する原理の包括力および影響力を種々の分野において試さんがため、他分野と接触することを余儀なくされるもの」と。^③

二に、「学際研究」という括りを存在させると、必ず「その定義は？」という無意味な問いも生じさせてしまう。事実、一九九六年の段階で既に「学際研究」が増加する状況を受けて「学際の定義が曖昧」という指摘があり、^④今年二〇二一年の東京カレッジ主催のシンポジウムにおいても、「学際研究の評価が問題」と述べられていた。^⑤学際(研究)とは学問の本性なのだから、その定義や評価の話はいずれも不毛である。それに挑んだとしても、結局は、なんだ学問そのものの話じゃないか、となるはずだからである、学者として考えたのなら。

経営者、管理者、あるいは研究者として考えるから、定義やら評価やらが問題となるのだが、それとて別に言わなくても最初からそこにあつたものを新たに名付け、「ここに問題がある」と挙手までして、不要な仕事を増やすことが本当の仕事ではあるまい。複数の学問体系の共同作業により新たな知を共有するのが「Inter-disciplinary」、複数の学問体系が共同で研究を行うのが「Multi-disciplinary」などと区別し何かがわかつた気になることや、「そうすると○○分野は学際研究と呼べるか」といった類の問いは、正直どうでもよい。

何より、「学際研究」を名付け、それを通常の専門と並列に扱つてしまつているから、定義や評価が気になるのだ。あえて学際研究という区分を使用するなら、——それは学問本来の姿であるので——通常の専門を超えた立ち位置におかないと辻褄が合わなくなつてしまう。

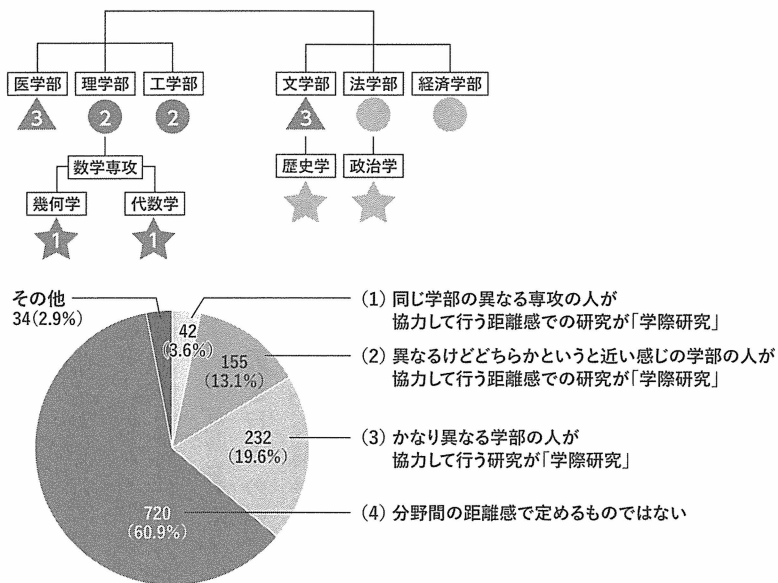
筆者は、とある研究助成事業の「学際研究」というカテゴリーの審査に関わつたことがあるが、そこで頻繁に眼にする「……について、○○学の観点からも検討し、学際的に考察を行う」という文章の無意味さである。こ

れは別に学際研究でもなんでもなくて、単なる申請者の研究進展に伴う他分野との接触という、ごく当たり前の営みであろう。目新しい流行りとして学際研究を掲げ、新しい何かを推進しようとしているにもかかわらず、既存の専門分野と並列に扱うから、実のところは何も新しいことを生み出していない。むしろ不要な問題を生じさせている点で罪とすら言える。哲学を確固たるものにさせたのが故に、それをつい一専門分野に閉じ込めたカントの失敗を繰り返してはならない。哲学が全てに共通する普遍であるが故に、それを諸専門分野から分離させると、それがそれでなくなるのだ。二十世紀になつてのあまりにテクニカルな哲学論文をまま目にするのは、こういう理由なのかもしれない。

ここに面白い調査結果がある。二〇二〇年十月に筆者の研究グループが実施した「学際研究イメージ調査」^②では、次の設問があつた(図2)。

〈問 あなたは、下記の図のうち、どこからを学際研究と呼びますか〉

図2 分野間の距離に関して、下記のうちどこまでを「学際研究」と呼びますか？



出典：学際研究イメージ調査

一見してわかるように、同じ学科内での分野的に親しい共同から、いわゆる理系同士の学部間の共同、そして、いわゆる文理融合と呼ばれる学術スタイルが大きく異なるとされる分野間の共同の三つの例を示して、研究者の肌感覚としての「学際研究」を探ったものだ。

結果、約六割を占めた最も多い回答が、「分野間の距離で定めるものではない」という回答であった。我が国の研究者もまだまだ捨てたものじゃない。むしろ、この回答を選択した本意は知る由もないが、「学際研究」なるものへのどこかしら違和感があるのだろうと推測される。

この回答から勇氣をもらい、本連載企画は大きな挑戦に踏み出す。個の分野から幹を辿り全たる大本の幹へ向かう過程を様々な分野の研究者有志で実体験して、それを共同執筆として一つの論考にまとめることに挑むのである。直ちに読者の中には「A I の倫理」といった比較的イメージしやすい今日的課題についての連携テーマを

想像したかもしれないが、幹を辿る営みというものはそうではないだろう。当然ながら今日の課題について複数の分野が連携して考究することは非常に重要ではあるが、本企画で狙うのは、かのC・P・スノーが言うところの「二つの文化」——いわゆる理系といわゆる文系の精神風土の相違⁷⁾——の並列的連携ではなく、その源流を辿ることによる二つの文化の融解である。

そもそも何なのか……。どのような対象についてであれ、どのような専門であれ、考えつめたその深さにより感受し共有されうる全体的思想は、その熟度が高いほど、入り口である二つの文化の重要性は相対的となる。スノーは、二つの文化の解消を教育に求めたが、本企画では、学者たらんとする研究者の構えに頼る。

今日の学術界を覆っている、過度な商業主義、業績主義⁸⁾において、我々研究者も日常のよくわからない忙しきにつき飲み込まれがちであることは否定できない。そういう中においても、改めて研究というものを、そして研究者という人生を見直し、学問に対する自身の態度を磨いていく。そう、この企画は研究者として学問と再契約す

るその開始なのである。

現時点で、どのような研究者らで挑むのか⁹⁾、最終論考はどのようなものかは白紙であるが、最終論考の前に、自然科学系研究者が人文社会科学系研究の現場に赴いた実体験の報告や、その逆を試みる等の予定を立てている。実際に現場に向くことから、学問の在り方だけでなく、研究環境の在り方についても触れることになるだろう。最終的な共同執筆論考は果たしてどうなるか……。それが成功するかはわからないが、この挑戦に大いなる学びがあることだけは間違いない。

〔注〕(1)以降の二段落は下記の論考からの抜粋を含む。宮野公樹

「異分野融合の意味と意義」『まてりあ』日本金属学会会報、

二〇二一年六〇巻一〇号

(2) パウル・ティリッヒ『諸学の体系 学問論復興のために』清

水正・濱崎雅孝訳、法政大学出版局、二〇一二年

(3) 三木清・大澤聡編『三木清大学論集』講談社文芸文庫、二

〇一七年

(4) 赤司秀明「学際研究のための基礎的研究の必要性」『学術の

動向』一九九六年九月号

- (5) 東京カレッジ・連続シンポジウム「人文社会科学の未来」——文系・理系という区分の再考」<https://www.tcu-tokyo.ac.jp/all/ec/event/4417/>
- (6) <https://www.cpie.info/gakusai-anketto>
- (7) C・P・スノー『二つの文化と科学革命』松井卷之助・増田珠子訳、みすず書房、二〇一一年
- (8) これは明らかに大学人自身のせいではない現実と筆者は考えるものである。参考・現代ビジネスWEB記事「消費された「学術会議問題」…いま日本の大学が忘れつつある「大切なこと」」<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/79194>
- (9) 我こそは、という方はぜひご連絡を。ただし、参画を確約するものではありません。